



令和7年6月26日(木)～7月2日(水)

信楽ー土の賦 十二人展Ⅳ 「間、移ろい」

日本人の感性は、日本の自然から生まれたもので、春夏秋冬という季節の移ろいも、日本人の感性に大きく影響している。とくに、和歌には季節と季節の間(ま)を詠んだ歌が多く、それは茶の湯の間とも共通している。間は日本の文化であり、そうした日本人の感性が二十一世紀には注目されるだろうと、私は思っている。そのためには、欧米の価値観ではなく、日本人の価値観を伝える必要がある。工芸や美術は、その大切な役目を担っている。

表紙の作品は、古谷和也の《信楽五彩皿》である。緋色、窯変、ビードロ、焦げ、引出しといった信楽特有の景色を、本展のサブタイトルである「間、移ろい」と重ねて、信楽の四季の移ろいとして表現している。

青木寿美子の《花あわせ月映茶盤》は、この作家でない表現出来ない青木織部になっている。大概の織部作品は、桃山織部の呪縛から抜け出せないでいる。そう考えると、この作家の造る現代織部、すなわち、月明かりで見る花と鳥の大胆な文様が一層魅力的に見えてくる。特に文様の配置、間が絶妙である。

大西左朗の《信楽焼重不容変茶盤》は、焼ぎを重ねて容姿が変化していく様を表現したもので、茶碗の片面が銀化したような容姿を見せている。これは、一度穴窯で焼成した作

迫能弘は、窯も生活の場も信楽の自然の中にあり、植物や動物の住処を少し分けて貰って、私の生活があるという。《信楽茶碗》は左右からビードロが流れて、雪解けと共にでる露の臺を見るようで、早春を感じる茶碗である。作陶と向き合う時に、自然から受ける感銘が、心の奥の芯の部分になっていると迫は語る。

篠原 希が信楽の土の可能性に気付いたのは、アメリカの薪窯の研究者や陶芸家たちからだ。この《信楽引出黒茶碗》は、まず早いうちに灰の中に茶碗を埋め、灰が熔け始めた頃に掘りだして炎に当って熔けた瞬間に引き出す技法によって生まれた。篠原は、美濃や瀬戸で出来なかった技法でないと自分がやる意味がないという。

高橋楽斎は古希を過ぎて、常に自分らしく在りたいと学ぶことを怠らない。だから、彼の作品には過剰な表現がない。この《信楽茶碗》は、そんな楽斎の人生を物語っている。茶碗の景色は、焼成中に窯の上にあつた蹲(うずくまる)が転げ落ちて、茶碗と重なり偶然生まれたもので、側面の匔(へら)削りも程よく、なんとも気持ちの良い茶碗である。

高間智子の積層彩磁は、何種類もの色の磁土を何層にも重ね、模様を削り出すという独特な技法を駆使した作品である。この《積層彩磁―振出し―》は、積層されていく色彩と削り

品を、再度窯を変えて焼成したものだそうだ。信楽粘土の焼成には、まだ見ぬ表情がきつとあると信じて、これからも挑戦を続けて行きたいという。

奥田陶生にとって山茶碗は、自分自身に内在する神仏の化身だという。この《信楽山茶碗》には、そんな祈りが籠められているのだろう。そういえば、以前のものよりシャープになっているように思うのだが、気のせいであろうか。公募展ではないので、好きなものを好きなように作り続けるのが一番。これからも奥田らしい作品を作り続けて欲しい。

神崎秀策の作品は、いわゆる桶形の水指である。新作に挑戦すも、古典が気になるという。《信楽水指》は、そんな心の間(はざま)から生まれた作品である。小山富士夫は、その緋色の美しさを明るい夕日をあびた枯葉の林を見るようだと絶賛しているが、この火色の美しい鬼桶水指を眺めていると、そんな信楽の景色が思い浮かぶ。

小牧鉄平の《炭化彩色鉢》はガス窯焼成で、顔料とアルミナを混ぜたものを水で溶き、マスキングした鉢に色を塗り分け、焼成後にサンドペーパーで磨いて余分な顔料を洗い流し、生地に写り込んだのが模様になっていると話す。真横から見ると、幾何学的な模様が木立のように見え、赤、オレンジ、黄の交互の配色が自然の移ろいのようにも感じられる。

出される色彩の移ろい、組み合わせにより生まれた「色のあはひ(間)」を三種の振出しで見事に表現している。

谷 穹は勉強熱心である。古信楽は当時の高い技術によって醸成されたものだが、そうした技術や造形だけでなく、当時の陶工の高い精神性をも読み取ろうとしている。この《信楽蹲》は、谷の美意識が結実したものだが、それだけに「火の色」とはこういう出来事でありたい」という作家の思いが滲み出ている。

津守愛香の作品を見ると、小学校一年、三年、五年と愛娘の成長と共に、作品も成長しているように感じられるから不思議だ。二十年共に暮らした二匹の猫の一匹が先日旅だったという。《猫のせ坐像》からは、愛娘の成長と共に少しずつ変わる暮らしや日々の移ろいが感じられる。

古谷和也の混成シリーズの始まりは原土の面白さを表現することだった。しかし、原土だけで成形すると粘りが少なく可塑性がないため水漏れを起こす。そこで、作品の表面に原土を貼って原土の質感を出した。《信楽混成花入》は、穴窯から生まれる信楽の特色がうまく統合された古谷の傑作である。

紫香楽茶会

柿傳ギャラリーの上にある新宿柿傳の茶室にて、紫香楽茶会を開催致します。

席主は出品作家一同で務めさせていただきます。茶会に参加された事のない初心の方も大歓迎ですので、どうぞお気軽に、信楽ゆかりのお道具で、夏至の候の一品をお楽しみ頂ければ幸いです。

皆様からのお申込をお待ち申し上げております。

日時 7月1日(火)

11:00、13:00 席入の二席

※ 席入 15 分前まで受付・寄付(7階)にお集まりください。

席主 出品作家一同

場所 新宿 京懐石 柿傳(東京都新宿区新宿 3-37-11 安与ビル)
受付・寄付「安与ホール(7階)」

↓
薄茶席「残月亭(9階)」

↓
点心席「古今サロン(6階)」

点心 お食事の内容は、小向付、旬菜を盛り込んだ縁高、煮物、
椀、ご飯と香の物です。
もちろん、お食事に合う日本酒もふんだんにご用意しております。

会費 6,000 円(税込)

服装 お楽な格好で、ご自由にどうぞお出掛け下さい。

所要 1時間45分程度

申込 参加ご希望の方は、右の二次元コード又は
下記のお電話かメールからお申し込み下さいませ。

7/1 茶会
申込ページ



▶ お問い合わせ先

TEL 03-3352-5118

FAX 03-5269-0335

MAIL gallery@kakiden.com

電話は 11 時～ 19 時受付(ギャラリー休廊日を除きます)

信楽 一土の賦 十二人展 IV 「間、移ろい」

会期 令和7年6月26日(木)～7月2日(水)
会期中無休

開廊時間 11:00 ～ 19:00
※ 最終日の7月2日(水)は 17:00 まで

出品作家 青木寿美子 6月26日(木)～27日(金)
[在廊予定日] 大西左朗 6月28日(土)～29日(日)、7月1日(火)
奥田陶生 6月26日(木)、7月1日(火)
神崎秀策 6月30日(月)～7月2日(水)
小牧鉄平 7月1日(火)～2日(水)
迫能弘 6月30日(月)～7月1日(火)
篠原希 6月27日(金)、30日(月)～7月1日(火)
高橋楽斎 6月28日(土)～29日(日)
高間智子 6月26日(木)
谷穹 6月30日(月)～7月1日(火)
津守愛香 6月30日(月)～7月1日(火)
古谷和也 6月30日(月)～7月1日(火)
(五十音順)

会場 柿傳ギャラリー
KAKIDEN GALLERY

〒160-0022 東京都新宿区新宿 3-37-11

安与ビル地下2階

TEL 03-3352-5118 / FAX 03-5269-0335

MAIL gallery@kakiden.com



柿傳ギャラリー HP



公式 Instagram



お手間で恐縮ですが、弊廊ホームページや公式 SNS にて、
最新情報をご確認頂ければ助かります。



大西左朗

Onishi Satoki

先人には全く敵いませんが「やきもの」の焼きについて考えています。

信楽粘土の焼締にはまだ見ぬ表情がきっとあるんだと、面白い表情が現れるんだと。

昭和39年 滋賀県信楽町生まれ
昭和63年 東洋大学 社会学部 応用社会学科 卒業
平成5年 京都府立陶工高等技術専門学校 図案科 修了
平成18年 第17回 秀明文化基金賞
平成19年 現在形の陶芸 萩大賞展（山口県立萩美術館）
平成20年 第1回 いまどき、しがらき、かやりき展 大賞
平成25年 信楽焼伝統工芸士（総合部門）認定
平成30年 第11回 現代茶陶展 入選
第3回 日本陶磁協会奨励賞 関西展 入選

信楽 焼重ネ容変 茶盤
φ11.7×H6.7cm



青木寿美子

Aoki Sumiko

花マル 花見 花占い

ずいぶん花に縁遠かった私も うつわを作るようになって 急接近で大好きになった

月明かりで見る花に 時を止められながら。

愛知県名古屋生まれ
愛知県立芸術大学 美術研究科 大学院 陶磁科専攻 修了
平成8年 信楽にて作陶をはじめる
平成11年 信楽陶芸展 入選
平成12年 築窯、国際クラフト展伊丹 入選
平成14年 国際陶磁器展美濃 入選
平成20年 国際陶磁器展美濃 入選
平成25年 長三賞陶業展 長三金賞（グランプリ）
平成26年 第25回 秀明文化基金賞

花あわせ 月映茶盤
W12.7×D13.0×H8.9cm



神崎秀策

Kanzaki Shusaku

山から土を掘り、形を作り、薪で焼く。木を削り、漆を塗り、仕上げる。
水指一つ作るのも、最初から最後まで、全てを自らの手仕事で行いたい。
人の手が入れば入るほど、作家の想いが薄れるから。
作品には作家の想いをすべて詰め込みたい。
日々その気持ちを大切に、作品制作に打ち込んでいます。
自分の作りたいものと、周りの人の望むもの。
どちらに重きを置くのか、その間で日々思い悩む日々です。

昭和 58 年 滋賀県信楽町生まれ
平成 16 年 京都府立 陶工高等技術専門学校 修了
平成 24 年 第 59 回 日本伝統工芸展 入選 (同 60、62、65、67、70、71 回)
平成 27 年 第 44 回 日本伝統工芸近畿展 新人奨励賞
平成 28 年 第 27 回 秀明文化基金賞
平成 30 年 現代形の陶芸 萩大賞Ⅳ入選、第 3 回日本陶磁協会奨励賞 関西展 入選
令和 4 年 裏千家家元より茶名「宗秀」拝受
令和 6 年 備前・現代陶芸ビエンナーレ 審査員特別賞
令和 7 年 平和堂財団芸術奨励賞

信楽水指

W22.5×D23.5×H19.0cm



奥田陶生

Okuda Sueo

自分自身に内在する 神仏の化身 山茶碗

昭和 41 年 滋賀県信楽町生まれ
昭和 62 年 京都府立陶工職業訓練校 成形科 修了
平成 6 年 ギャラリー陶園 (信楽) 個展 (以降、平成 18、25 年)
平成 30 年 ギャラリー悠 (静岡) 個展
令和 元年 第 30 回 秀明文化基金賞
令和 6 年 シェフイチ推しの、Shigaraki Style 展 (滋賀県立陶芸の森 陶芸館)
Peters Valley School of Craft ワークショップ参加 (アメリカ)

信楽 山茶碗

φ16.0×H5.0cm



迫能弘

Sako yoshihiro

私が生活し、窯をついた場所は、自然の中です。
植物や動物の住処を少し分けてもらったようなものです。
ですから、その自然から四季はもちろんのこと、日々の移ろいを感じます。
その日々の積み重ねが時代であり、生活の積み重ねが文化と昇華していると感じています。
自然から受ける感銘は、私が作陶と向き合う時に、心の奥の芯の部分になっているのだと思います。

昭和46年 奈良県桜井市三輪生まれ
平成4年 辻清明氏に師事 やきものを志す
平成7年 石川県立九谷焼技術研究所 卒業 信楽にて修行
平成12年 信楽にて独立
平成21年 第56回 日本伝統工芸展 入選 (同62、64、67、69、71回)
平成22年 穴窯築窯
平成29年 台湾国立台南芸術大学にてワークショップ
平成30年 第29回 秀明文化基金賞、第3回 日本陶磁協会奨励賞 関西展 奨励賞
令和2年 日本工芸会 正会員 認定

信楽茶碗
φ11.5×H8.5cm



小牧鉄平

Komaki Teppei

信楽町多羅尾には、御斎峠という伊賀の地を遠くまで望める場所があります。
季節による山々や空の色、稜線、田園風景の移ろい、
時には雲海が発生しその風景を一変させます。
その時の今を目に焼き付け作陶を続けています。

昭和46年 茨城県生まれ
平成6年 京都精華大学 陶芸専攻科 卒業 信楽に移り製陶会社勤務
平成17年 信楽町多羅尾に移り独立
平成18年 日本伝統工芸近畿展 入選 (以降14回入選)
平成21年 第23回 萬古陶磁器コンペ準グランプリ
平成23年 日本伝統工芸近畿展 新人奨励賞、第22回 秀明文化基金賞
令和2年 陶美展 奨励賞 (以降5回入選)、第67回 日本伝統工芸展 入選
令和4年 日本伝統工芸近畿展 滋賀県知事賞 令和5年 萩大賞展 入選
令和6年 備前・現代陶芸ビエンナーレ 2024 入選

炭化彩色鉢
φ24.0×H4.8cm



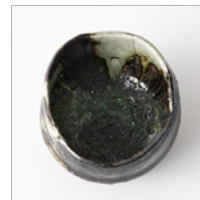
高橋楽斎

Takahashi Rakusai

窯焚中には、小さなトラブルが起きます。
窯詰の際、上に置いていたうづくまるに薪が当たり、下に落ち、
この茶碗と重なりました。
その結果、よく焼けた茶碗です。

昭和29年 滋賀県信楽町生まれ
昭和50年 滋賀県立信楽窯業試験場 卒業
昭和52年 荒川豊蔵先生のもとに互窯会結成
平成4年 柿傳ギャラリーにて個展（9回）
以降、日本橋三越本店、福岡三越、大阪高島屋、JR名古屋高島屋、京都高島屋、
山口井筒屋にて個展
平成22年 五代 高橋楽斎 襲名
令和3年 「信楽に生きる 高橋楽斎 高橋美子 田尾 晃 三人展」（柿傳ギャラリー）

信楽茶碗
φ11.0×H8.0cm



篠原 希

Shinohara Nozomu

鉄の熔けた黒色と燃料の薪が高温で熔けた青色が同居するにはどうすれば良いか？と
考えながら茶碗を焼いています。

昭和47年 大阪府生まれ
平成3年 信楽 古谷信男氏に師事
平成10年 信楽窯業技術試験場 釉薬科 修了
平成11年 信楽町黄瀬にて独立作陶 平成16年 伊賀に新たに穴窯を築く
平成19年 信楽焼伝統工芸士に認定される 平成24年 第23回 秀明文化基金賞
平成26年 講談社モーニング連載「へうげもの」破れ登場回での作画協力
令和元年 Stanford University, Utah State University にて
ワークショップとトレインキルン窯焚きに参加
日本伝統工芸近畿展 入選など ほか各地でグループ展など多数

信楽引出黒茶碗
W12.3×D11.6×H7.8cm



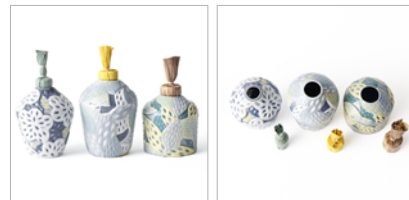
谷 穹

TANI Q

火の色とはこういう出来事でありたい

昭和52年 滋賀県生まれ
平成19年 双胴式穴窯築窯
平成24年 単室式穴窯築窯
平成26年 信楽大壺がポートランド美術館（アメリカ）に収蔵される
平成27年 「ロローロロ」京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA（京都）個展
令和元年 「Air」NOTA_SHOP（滋賀）個展、「火色」甑粋（京都）個展
令和2年 「健在する日本の陶芸ー不如意の先へー」益子陶芸美術館（栃木）
令和3年 「No Man's Landー陶芸の未来、未だ見ぬ地平の先ー」兵庫陶芸美術館（兵庫）
令和7年 「Q」谷 穹 個展／和光 アーツアンドカルチャー（東京）

信楽 蹲
φ20.1×H19.5cm



高間智子

Takama Tomoko

積層されていく色彩と彫り出される色彩の移ろい。
組み合わせにより生まれた『色のあはひ【間】』を楽しんでいただければ幸いです。

平成17年 大阪芸術大学大学院 芸術制作研究科 修士課程造形表現Ⅴ 修了
平成19年 京都高島屋 個展（平成26年、29年、令和2年）
平成23年 滋賀県立陶芸の森スタジオアーティスト、大阪高島屋 個展（平成25年）
平成26年 日本伝統工芸近畿展 新人奨励賞、第25回 秀明文化基金賞
平成29年 アートフェア東京2017（東京国際フォーラム）、華やぎの陶（銀座和光）
平成30年 第3回 日本陶磁協会奨励賞 関西展 入選
令和7年 高間智子 陶展「あはひ」（日本橋高島屋）
その他個展、企画展多数

積層彩磁一振出しー
[左] φ5.7×H9.8cm [中] φ5.8×H10.0cm [右] φ5.6×H9.4cm



古谷和也

Furutani Kazuya

表紙の作品は、緋色・窯変・ピードロ（酸化）・焦げ・引出しと穴窯で出る景色を1組の作品で表現しました。
「移ろい」とのテーマ。
1枚1枚それぞれに四季の移ろいを感じて頂けると幸いです。

昭和51年 滋賀県信楽町生まれ
平成10年 京都府立陶工技術専門校 卒業 父、古谷道生に師事
平成14年 穴窯築窯 (以降4基築窯)
平成15年 日本伝統工芸近畿展 入選 (以降12回入選)
池袋東武百貨店にて初個展 (以降平成12年迄毎年個展)
阿曾美術にて個展 (以降隔年個展)
平成21年 名古屋栄三越にて個展 (以降隔年個展)
平成25年 大阪高島屋にて個展 (以降隔年個展)
平成26年 第26回 秀明文化基金賞
平成27年 日本伝統工芸近畿展 新人奨励賞
令和元年 日本橋三越本店にて個展
令和3年

信楽混成花入
φ20.8×H22.5cm



津守愛香

Tsumori Aico

我が家の猫達も20歳になり、先日一匹旅立ちました。
少しずつ変わる暮らしや日々。

昭和54年 滋賀県生まれ
平成14年 京都市立芸術大学 卒業、朝日陶芸展 入選 (以後、平成15、17、18年)
平成15年 女流陶芸展 新人賞
平成19年 長三賞陶芸ビエンナーレ 奨励賞
平成27年 第6回 菊池ビエンナーレ 優秀賞
平成29年 第28回 秀明文化基金賞、第7回 菊池ビエンナーレ 優秀賞
平成30年 第43回 滋賀県文化奨励賞
令和5年 陶芸の進行形 (菊池寛美記念 智美術館)
令和6年 個展 ーキラキラやきものあつめー (日本橋高島屋)

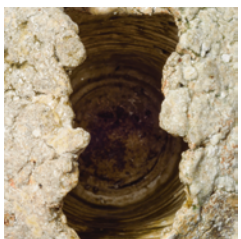
猫のせ坐像

W24.0×D22.5×H36.0cm

これまでの「信楽 一土の賦 十二人展」



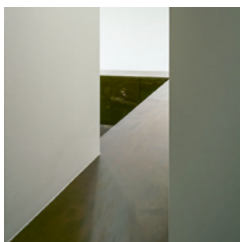
信楽 一土の賦 十二人展
平成 31 年 3 月 15 日(金)～21 日(木)



信楽 一土の賦 十二人展 II
令和 3 年 5 月 7 日(金)～13 日(木)



信楽 一土の賦 十二人展 III
祈りの系譜
令和 4 年 1 月 23 日(日)～29 日(土)



新宿で大人の道草を。

不器用ギャラリー
KAKIDEN GALLERY

価格表

作家名 作品名		本体価格/円 (税込価格/円)	作品サイズ (cm)
1 青木寿美子 花あわせ 月映(つきばえ) 茶盃 [桐箱付]	P6	60,000 (66,000)	W12.7×D13.0×H8.9
2 大西左朗 信楽 焼重ネ容変 茶盃 [桐箱付・後日]	P7	70,000 (77,000)	φ 11.7×H6.7
3 奥田陶生 信楽 山茶碗 [桐箱付]	P8	30,000 (33,000)	φ 16.0×H5.0
4 神崎秀策 信楽水指 [桐箱付・後日]	P9	130,000 (143,000)	W22.5×D23.5×H19.0
5 小牧鉄平 炭化彩色鉢 [桐箱付・後日]	P10	80,000 (88,000)	φ 24.0×H4.8
6 迫 能弘 信楽茶碗 [桐箱付・後日]	P11	65,000 (71,500)	φ 11.5×H8.5
7 篠原 希 信楽引出黒茶碗 [桐箱付・後日]	P12	70,000 (77,000)	W12.3×D11.6×H7.8
8 高橋染斎 信楽茶碗 [桐箱付・後日]	P13	130,000 (143,000)	φ 11.0×H8.0
9 高間智子 積層彩磁一振出し一 [箱無し]	P14	各 20,000 (各 22,000)	[左] φ 5.7×H 9.8 [中] φ 5.8×H10.0 [右] φ 5.6×H 9.4
10 谷 穹 信楽 蹲 [桐箱付・後日]	P15	200,000 (220,000)	φ 20.1×H19.5
11 津守愛香 猫のせ坐像 [箱無し]	P16	380,000 (418,000)	W24.0×D22.5×H36.0
12 古谷和也 信楽混成花入 [桐箱付・後日]	P17	160,000 (176,000)	φ 20.8×H22.5
13 古谷和也 信楽五彩円皿(組) [箱無し]	表紙	100,000 (110,000)	各 φ 22.0×H2.0

160-
0022

東京都新宿区新宿3-37-11

柿がギャラリー

KAKIDEN GALLERY

